

氏 名	桑 原 知 子 <small>くわ ばら とも こ</small>
学位の種類	教 育 学 博 士
学位記番号	教 博 第 6 号
学位授与の日付	昭 和 62 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	教 育 学 研 究 科 教 育 方 法 学 専 攻
学位論文題目	人 格 の “二 面 性” に つ い て

論文調査委員 (主査) 教授 河合隼雄 教授 坂野 登 教授 田中昌人

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は人格の「二面性」という点についての理論的考察を基に、「二面性」を数量的に測定する、いくつかの方法を考案し、信頼性などの検討を行ったものである。

論文は4章にわかれ、第1章人格の“二面性”，特にその測定に関する理論，第2章人格の“二面性”測定のための尺度の作成，第3章“二面性”の観点からみた人格特性，第4章人格の“二面性”について—その総合的考察—から成立っている。

第1章は、人格の二面性について、その理論的背景および、これまでの考え方や研究についてのべ、論者の考えを明らかにしている。人間は自らのなかに相反する二つのものが共存していることに気づくことが多いが、心理学においてそれを取り扱おうとするとき、特にその測定に困難を生じるので、あまり取りあげられてこなかった。Jung や Maslow が人格の二面性の存在について積極的に論じているが、Jung の向性の考えも、それが向性検査として測定されるときは、外向と内向は一次元上の両極となり、その両者が両立する可能性がなくなってしまう。ただロールシャッハテストの体験型の考えが、相反する傾向の共存を許すものとなっているが、これは投影法のテストであり、論者は、人格の二面性を質問紙法によって測定しようとするものである。

第2章においては、人格の二面性測定のための尺度の作成について、論者の考案した測定法が詳しく述べられている。論者は従来より用いられている semantic differential の技法を参考にし、たとえば自分の性格を判定する際に相対立する形容詞、「やさしい」、「きびしい」を対として提示し、それぞれ「全然あてはまらない」から「まったくあてはまる」まで0～6の7段階に評定するように要求し、それぞれの形容詞に対して独立に評定させる。つまり、この際、極端な場合は、「やさしい」に対しても「きびしい」に対しても、6と評定する可能性を与えるのである。このような質問紙を作成し、これと従来からの semantic differential の技法による結果とを比較し、新たな指標を導入することによって、人格の二面性を把握することを、ある程度可能にした。

この方法において、形容詞としては肯定的 (positive) な性質のものばかりを選んだが、続いて否定的

(negative) 語を用いて調査を行い、最終的には肯定、否定の両方を組合わせた質問紙を作成した。その結果、positive 語でも negative 語でもある程度同様の結果を得たので、項目のもつ望ましさ以外の要因によって項目への反応を行っている部分が多いことが示唆された。一方で、二面性を示すとされた群は、positive と negative でその像が異なっており、また、自己を望ましくみせようとする構えの混入に対しても数量的にチェックできる利点も見出すことができた。

以上の点を踏まえて改良した二面性テストの結果を、従来より性格検査としてよく用いられてきた、Y-G 性格検査や MMPI と比較検討し、二面性テストが性格テストとしても妥当性をもつことを明らかにした。またこのテストに関する信頼性については、テストに2回用いられる項目の評定値間の相関係数によって調べ、望ましい結果が得られた。

第3章においては二面性からみた人格特性を他のテストとの比較によって明らかにした。その結果、positive 二面性群は、活動性が高く、健康的で、社会的にも適応的である。また構えにとらわれない柔軟性を有することがわかった。negative 二面性、positive 群に比し、情緒的不安定さが顕著であった。また非活動的であるが、知的な面では活動性が発揮されていることが示唆された。いずれにしろ二面性の強い群は、そのエネルギー量の多さが感じられた。

第4章は総合的考察であり、人格を矛盾を含みつつも統合性をもつ全体としてとらえることの意義、および、それを二面性測定尺度によってある程度可能としたことが論じられた。また人格の二面性について今後考えてゆく上での問題提起がなされ、二面性の統合度の高いときと低いときと質的な差に注目すべきこと、二面性のモデルについて、今後ダイナミックに人格を捉えうるようなモデルを考え出すべき必要性が提言された。

論文審査の結果の要旨

本論文は人格の二面性という点を取りあげ、それを数量的に可能なものにしようとする努力がなされ、それについての妥当性、信頼性について、いろいろな観点から検討されている。このような試みはこれまでの心理学の研究においてなされておらず、その着想は独創的なものである。心理学における人格測定に関してはそのモデルに矛盾を含まぬようにされてきたが、本論文は人格を矛盾を含みつつ統合されたものとして考えようとする点、それをあらたに考案された二面性測定尺度によって測定しようとする点に創意が認められる。

しかしながら、その尺度を詳細に検討してみるときは、それは厳密に「二面性」として定義し得るものであるかについて疑念を生じさせるものがある。今後より対概念的な形容詞を多く利用して、同様の結果が得られるかどうか検討すべきであろう。しかし、論者も意識しているのであるが、「二面性」が測定されたというためには、相対立するとされた形容詞対は一次元の両極に位置するとされなければならないのに、そのような対はごく僅かしか用いられていなかったからである。「二面性」の測定についてある程度の成果をあげた点において一応満足できるといえるであろう。

一方、自ら考案した二面性尺度において、positive と negative の項目をわけて比較検討した結果は今後の人格テストおよび人格そのものについて考えてゆく上で新しい知見を加えたものということができる。

また二面性尺度と他の諸テストとの比較を詳細にわたって行った結果も、人格テスト研究において有用なものである。

ただ人格の二面性の質問紙法による測定という、まったく新しい領域に足を踏み入れたため、今後さらに検討してゆくべき多くの課題を残していることも事実である。既に述べたが人格の二面性についてその本質を一層掘り下げて考えるべきであるし、その発達の側面についても考察し、それに対する調査研究も必要であると思われる。

このように点を残しているが、これも新しい課題に取り組んだために生じたことでもあり、本論文において示された二面性測定尺度の考案とその検討結果は、人格測定における新しい視点を提示した意義をもつものである。

よって、本論文は教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。

また、昭和62年1月27日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

